

当座理論とはなにか

Donald DAVIDSON's Passing Theory

尾形まり花
OGATA Marika

要旨 ドナルド・デイヴィドソンは、人が他者の言わんとするところを理解する時、前もって持っていた知識だけでは相手の言うことを理解できないことがあると言う。言い間違いや不明瞭な発話などを理解しようとするとき、われわれが用意する発話の解釈理論をデイヴィドソンは、当座理論 (passing theory) と呼ぶ。だが、この当座理論という概念は多くの哲学者から批判されてきた。本稿は当座理論に対する批判とその批判に対するデイヴィドソンの反論はどちらもまくいってはいないを考える。そして、当座理論とは、単に話者の話す言葉を理解するのではなく、話者と解釈者を含んだその場の出来事全体に対する解釈であると論じ、当座理論が成立する概念であることを示す。

1 マラプロップ婦人の言い間違い

われわれはしばしば他者の発言がすぐには理解できないことがある。他者の使った言葉が自分の文化圏に属していないときや、造語やしゃれなどの解釈に関してはわれわれはしばしばこれまで持っていた他者に対する解釈理論では解釈できない。またわれわれは頻繁に言い間違いをする。デイヴィドソンは、そのような解釈の場では、われわれの解釈がこれまで習得してきた知識や意味による解釈理論を用いるだけではなく、解釈者がその場で話者を理解することによって新しい理論を形成することがあると言う。

たとえば、われわれは料理中に、できあがった料理の入った重い鍋を両手で持ちながら、そばにいた人にあわてて「下敷きをしいて」と言ってしまうかもしれない。しかし、聞き手が優秀な解釈者であれば、プラスチックの下敷きではなくコルクの鍋敷きを敷いてくれるだろう。(優秀でかつふざけていないのであれば。) そのとき「下敷きをしいて」という私の発話の「下敷き」はこれまでに習ってきた「下敷き」という語の使い方には一致していない。しかし、それでも私はその時、言いたいことを理解されたと考えることができるだろう。

デイヴィドソンは、語が通常とは異なる使い方をされながら、それでも相手に話が通じてしまう例としてR.B.シェリダンの戯曲に出てくるマラプロップ婦人という人物をあげる。マラプロップ婦人は彼女が言うべきだった言葉を違う言葉に言い間違えてしまう。例えば彼女は"A nice arrangement of epithets"(あだ名のすてきな言い回し¹⁾)と言おうとして、"A nice derangement of epitaphs"(墓碑銘のすてきな乱れ)と言ってしまう。彼女は「墓碑銘」に関することを話そうとしているわけではない。ただ言い間違い (slip of tongue) をしているのである。デイヴィドソンがこの他にあげている例の一つは、"We are all cremated equal"(われわれはみな誰もが平等に埋葬される) という例である。説明はないが、これは"We are all created equal"(われわれは誰もがみな平等に作られている) のマラプロピズムであろう。

"epithets"と"epitaphs"には音が似ているというつながりはあるが、意味にはつながりはない。しかし、それにもかかわらず彼女の言おうとしていることは理解される。デイヴィドソンによればマラプロップ婦人の例は、「解釈者は話者を理解するための正しい理論を前もって (in advance) 持っているわけではないのに、話者は自分が意図するとおりに解釈されることを期待し、実際に解釈されてもいる」という例である (p.99)。

マラプロップ婦人の発言が「A nice arrangement of epithets (あだ名のすてきな言い回し)」という発言であれば、(その発話は舞台上の状況に一致し) われわれは、これまでわれわれが習得してきた言葉の意味を参照するだけで婦人の言うところを理解できる。しかし、「A nice derangement of epitaphs (墓碑銘のすてきな乱れ)」という、その場ではすぐには理解できない発言が登場したときに、われわれは、われわれがこれまでに習得し、前もって持っていた解釈理論だけでは、その発言を理解できないことを悟る。そこでわれわれは婦人の当の発話中に、婦人の言う「墓碑銘のすてきな乱れ」が何を表すのかを解釈するための情報を得ようとする。そのようにして、前もって用意されていた理論以上の理論が、解釈者の中で発言を聞いているまさにその時に形成される。

デイヴィドソンはこのことから、解釈理論には区別されるべき二つの理論があると考ええる。一つは聞き手が話者を解釈するために前もって準備できる「先行理論 (prior theory)」であり、もう一方は話者を現に理解するための「当座理論 (passing theory)」である (p.101)。

デイヴィドソンによれば、先行理論と当座理論が区別できるということ (つまり当座理論が存在するという事) は、言語における規約の重要性を掘崩してしまうという。なぜなら、「前もって」決まっている言語の規約や慣習に訴えるのでは、解釈者はマラプロピズムを理解できない。マラプロピズムの意味は「前もって」決まっていはいないからだ。どの解釈も全て先行理論だけで収まるのであれば、話者と解釈者は範囲を確定された言語だけを共有していればよい。しかしマラプロピズムは確かに存在し、理解もされる。よって多くの言語学者や、規約によって言葉を定義づけようとする哲学者²⁾が考えるような、範囲を確定された言語というものには存在しないという。マラプロップ婦人がひとたび言い間違えただけで、「墓碑銘」に新たな役割を与えるための当座理論は召喚され、言語の範囲は変わってしまうからである。

しかし、それでは語はそれぞれの意味を持っているにもかかわらず、いつでも話者の好みのままに意味を変えられてしまい、それにもかかわらず解釈者は話者の意味するところをだいたいにおいて解釈できるというのだろうか。

デイヴィドソンによればそれはそうではない。たとえば、ハンプティ・ダンプティはわれわれに共有のものであるはずの語の意味を勝手に変えてしまう。ハンプティ・ダンプティは「あなたに栄光のあらんことを！」と言うことで、「おまえさんにとっては全く言い負かされちゃった議論だ」という意味を表そうとする。これは「墓碑銘のすてきな乱れ」と言うことで「あだ名のすてきな言い回し」を表してしまうマラプロップ婦人にそっくりである。しかし、デイヴィドソンによれば、ハンプティ・ダンプティはマラプロップ婦人とはまったく異なるという。なぜなら、ハンプティ・ダンプティはアリスがハンプティ・ダンプティの言葉を理解しないことを知っているからである。ハンプティ・ダンプティは「むろん分からないだろう、こっちが説明してあげるまではな」とアリスに言う。それゆえ、

ハンプティ・ダンプティの例とマラプロップ婦人の例を一緒にしてはならないのである（p.98）。

デイヴィッドソンが言うように、われわれの日常生活における他者への解釈は、しばしばわれわれがこれまで習得してきた言語の意味の範疇を超えることがある。マラプロップ婦人のように個性的な人物との対話でなくとも、自分とは世代の離れている人や、異なる地域に住む人と話すときには、われわれはしばしば、その場その場で当座理論を構築しようとする。また、多くの冗談や駄洒落もこの理解を見込んで言われているだろう。われわれはこれまでに習ってきた慣習の中だけで言語を話し、互いを理解しているのではなく、常に言語を作り出しているとも言えそうである。

そうであるのなら、規約によって意味の範囲は発話に前もって決定され、話者と解釈者の言語使用の範囲は確定しているという、しばしば考えられる言語に対する規約主義的理解は、当座理論の存在によって否定されていると考えることができるだろう。

2 規約主義者からの反論

前節では、マラプロピズムが存在するということからデイヴィッドソンが提出した言語に対する新たな見方について確認した。デイヴィッドソンによれば、マラプロピズムのような個人言語は現に理解されているのであり、そのような理解が成り立つのであれば、これまで考えられてきた意味での言語というものは存在しないということであった。

しかし、以上のようなデイヴィッドソンの議論は、これまでの言語に関する見方を否定するものであり、当然ながら多くの反論が提出された。その多くが「言語にとって規約は必要不可欠だ」という点を強調する反論である。そこで、主にその観点からの反論をいくつかとりあげて検討していこう。

I. ハッキングは、デイヴィッドソンの上記の議論に対して、ウィトゲンシュタインの私的言語論を引き合いに出してこのように批判する。

コミュニケーションに関心を持っているデイヴィッドソンは、私的言語の問題を重要視していない。（中略）（しかし）デイヴィッドソンは解釈があると言うために解釈者と話者の二人しか必要としないが（中略）われわれが（意味の）正誤の基準（criteria）がなくてはならないと考えるなら、二人という人数は十分な人数だろうか。（中略）正誤という考えが登場する場である共同体には、多くの構成員が必要であると考えられる。（中略）われわれはデイヴィッドソンを、独我論者（solipsist）の「一人」を「二人」にしかだけの「独我－汝論者（duetist）」と呼ぶだろう。（Hacking [1986]³p.458）

ハッキングが理解する「私的言語の問題」とは、第一章で検討したグロックの立場に近いと言えるだろう。ハッキングによれば、言葉には基準が必要であり、ただ二人の間で通じればいいというものではない。そして基準を形成するためにはより多くの人間の参加が必要である。そうでなければ、ウィトゲンシュタインが論じたように、「正しいと思うこと」と「正しいこと」の間に区別がなくなってしまう。ところが、デイヴィッドソンは二者のコミュニケーションにおいて「通じる・理解できる」ということを言葉の中心に考えているために、

この私的言語の重要な考察に関心を払っていないと、ハッキングは考えるのである。

また、M.ダメットは、デイヴィッドソンは言語を使うことに規則とその背景にある慣習がどれだけ深く関わっているのかをわかろうとしていないと批判する。ダメットによれば、デイヴィッドソンはハンプティ・ダンプティとマラプロピズムを区別するが、規則ではなく話者の意図が言葉の意味を決めると考える点で、デイヴィッドソンはハンプティ・ダンプティと同じなのだと、以下のように言う。

デイヴィッドソンへの反論として私が主張したい見方は、アリスの描いた言語像に合致する。その像によれば、語は、話者からは独立して、語自身で意味を持つのである。

(中略) 語は、言語に属していることによって意味を持ち、それゆえ社会的実践が存在することによって意味を持つ。しかし語は、特定の話者からは独立に、それ自身で意味を持つ。(中略) 話者は言語を知り、特定の文のような適切なコンテキストで語を発すれば良いのである。特定の事例では彼は⁴⁾心の中で解釈をするかもしれないが、すべての事例で解釈をするということはないだろう。(Dummett[1986]⁵⁾p.473)

ダメットによればデイヴィッドソンは語の意味を話者の意図に引きつけて考えすぎている。それはあたかも、話者の意図のままに語の意味が変わってしまうかのような像である。だからこそ、デイヴィッドソンはこれまで考えられてきたような共有された規則／意味を持った言語などというものはないと考えるのであろう。しかし、実際はそうに語の意味が変わってしまうということはまれな事態なのだ。通常的事例では、われわれは特別な解釈を働かせずに、これまで学習してきた語の意味を生かして話者の言うことを理解するのである。ダメットの主張をまとめればこのようになるだろう。

ハッキングの批判もダメットの批判も重要なところでは一致していると見て良いだろう。それは語の意味に関してである。デイヴィッドソンは語の意味を慣習から離れて自分(もしくは自分たち)だけで自由に変えられるように考えているが、それは誤った見方である。なぜなら、ハッキングによれば語はより大きな共同体においてのみ、その使い方の正しさがあきらかになるからであり、デイヴィッドソンの考える二人では足りないからだ。また、ダメットによれば、語が話者の意図に支配される部分はデイヴィッドソンが考えるよりもずっと小さく、語が意味を持つには言語全体を考える必要があり、言語全体を理解するのは、すなわち社会や慣習を必要とすることなのである。

そのため、ダメットやハッキングによれば、デイヴィッドソンの言う「これまで考えられてきたような言語などというものは存在しない」という主張は受け入れられない。デイヴィッドソンは、これまで習ってきた慣習が語の意味を決めないのであれば言語学者や哲学者の考える共有される慣習の総体のような言語は存在しないと、考えるのかもしれないが、そのような例外的部分は小さいからである。

3 デイヴィッドソンの応答

言語にとって規約が重要であると考えた立場からの、デイヴィッドソンへの批判を見てきた。それによれば、デイヴィッドソンはマラプロピズムが理解されることと、ハンプティ・ダンプティが理解されないことの間に大きなちがいをみているが、語の意味を話者の意図

に引きつけて変えることができると考えている点でハンプティ・ダンプティと同じ問題を抱えているということであった。

それでは、デイヴィッドソンのマラプロピズム、つまり個人言語が可能だという話は、言語という大きなとなみにおける、ほんの小さな例外に過ぎないのであろうか。

しかし、そもそもハッキングとダメットの前提としている言語観ははたして妥当なものなのだろうか。ここにあるのももまた、一章で論じた「私的言語」と「個人言語」のちがいの問題なのである。ダメットもハッキングもすでに言語を習得した大人をマラプロピズムの主体に考えながら、そのような主体でもなお、習得してきたルールどおりに話さなくては言語は成り立たないかのように考える。しかし、それではグロックの議論がわれわれの言語ならぬ言語の余地を残してしまったように、マラプロピズムをもっと困難な問題——私的言語の問題——に格上げしてしまう。しかし、マラプロピズムは現に他者に通じている。問題はマラプロップ婦人の言葉が通じてしまうのだというところにあるのだ。

デイヴィッドソンは以下のように言う。

もし私が、第一言語はいかにして学ばれるかという非常に難しい問題に関心を持っていたのだったら、新しい語と一緒に新しい概念や意味を獲得することと、なじみの概念に新しい語を獲得するだけのことのコントラストは見逃せなかっただろう。しかし、それにひきかえ私の問題は単純である。私が知りたいのは、すでに言語（それが正確には何を意味するのであれ）を持っている人が、実際の解釈の事例に、どのように彼らのスキルや知識を適用してみせるのかということなのである。(Davidson [1986] p.100)

デイヴィッドソンがここで述べているのは、私的言語の問題と個人言語の問題が明確に異なるということである。私的言語の問題は、これまでウィトゲンシュタインの名前を引き合いに出してしばしば論じられてきたような、（大人が）言語のルールを守るのか否かにあるのではない。そのような問題はここでデイヴィッドソンが関心を持っているマラプロピズム（＝個人言語）の問題なのである。個人言語の主体はすでに言語を習得している人である。この議論は、そのような大人がすでに習った規則から逸脱する自由を獲得しているという事実があるというところから出発している。大人だけがマラプロピズムを理解することができる。（こどもはマラプロピズムを言うことはあるかもしれないが。）個人言語の問題とは、すでに言語を習得した人は、すでに知っている概念に新しい語を当てはめる事ができるという問題なのである。

それにひきかえ、第一言語習得中のこどもは、新しい語と新しい概念を同時に学ばなくてはならない。そのようなこどもはマラプロピズムを理解できないだろう。おそらくこどもは「墓碑銘」という言葉が舞台上の何かのことであると当然思いこんでしまうからだ。（大人がなぜ笑っているのかも理解できないに違いない。）

このちがいが意味するのは、デイヴィッドソンとダメットのあいだにある、言語における社会性がどこに関わっているのかに関する見解のちがいである。デイヴィッドソンもダメットも、言語に社会性が大きく関わっているということについては一致している。しかし、ダメットのように、大人になった人物でも言語のルールに従う必要があると考えることは、

社会性がそれぞれの一回一回の実践に関わらなくてはならないと考える立場である。つまり実践はすべて規約に則って行われる。それは一回一回の言語使用に、共同体の基準が関わると考えるのと同じである。

対してデイヴィッドソンの立場は言語の習得に社会性に関わるという立場である。個人は社会的なとなみから言語を習得する。しかし、言語を習得した後にはそのルールの外に立つことができると考える立場なのである。

ダメットやハッキングらの規約主義的立場からの批判と、デイヴィッドソンからの再反論を見てきた。デイヴィッドソンの主張は、言語の社会性をそのつどごとの言語使用ではなく、習得に見いだすために、共同体の他の人と「同じ」実践（＝あらかじめ決まっているルール）をする必要はないと考える立場であった。

以上のようなデイヴィッドソンの「個人言語」の問題設定は、現に実際の言語使用の場面でマラプロピズムが通じているという事実にてらしても説得的である。また、ダメットは「すべての事例で解釈をするということはないだろう」と言うが、むしろわれわれは常に解釈しているのではないか。たとえば、「ありがとう」ということばであっても、実際はわれわれは「ありがとう」ということばで感謝や好意を示すこともできるが、敵意や軽蔑を示すこともあるだろう。われわれはしばしば辞書的意味が確定していることばに対して、そのことばが実際に使われたときには、「それは、どういう意味で言っているのか」と問うことがしばしばあるのである。

4 マラプロップ婦人とハンプティ・ダンプティ

デイヴィッドソンはくりかえし、マラプロピズムが現に存在することを強調する。そして、そのような使用がルール違反だと批判するダメットやハッキングに対してアリストテレスのたとえを持ち出して批判する。現に通じている言語に対してルール違反を指摘するのは、無生物であるワインに対して「よくあれ」と求めるようなナンセンスなのである（Davidson [1994]p.118）。

しかし、これで問題は全て解決されたのだろうか。たしかにマラプロピズムは通じてしまう。その意味でデイヴィッドソンは説得的に議論を進める。しかし、一方でハンプティ・ダンプティのことばは通じない。それはまさにハンプティ・ダンプティがダメットの言うように、共同体と同じことばづかいをしないからではないのだろうか。

ダメットによれば、言語使用の一回一回ごとに個人がルール変更をするのなら、その個人が話す言語が正しいか正しくないかは判断できなくなってしまう。社会は一回一回の使用の場面に介在しなくてはならない。言語の意味をどんどん変えてしまうハンプティ・ダンプティが、いつも自らを「正しい」と考えながら、他者であるアリスには理解されないように他者からは理解されない。意味に関して話者の意図を重視するデイヴィッドソンは結局はハンプティ・ダンプティの仲間ではないかというわけだ。

デイヴィッドソンはマラプロップ婦人とハンプティ・ダンプティを区別した。マラプロップ婦人は理解されるのに対して、ハンプティ・ダンプティは理解されないからだ。しかしダメットによれば両者は基本的には同じように話しているという。デイヴィッドソンはこの疑問に対してどのように応答できるだろうか。

デイヴィッドソンによれば、ダメットがマラプロップ婦人とハンプティ・ダンプティを同じように考えてしまうのは、ダメットのマラプロピズム理解が現実の解釈の場面に即していないからだという。デイヴィッドソンの意味論では、意味はむしろ話者の意図ではなく、解釈の側に存在するのである。そのため話者も自分がどう解釈されるのかについて考えながら発話をしているはずだとデイヴィッドソンは考える。ダメットの上記論文への再反論として書かれた論文「言語の社会的側面」(Davidson[1994])から引用しよう。

話者が社会的に受け入れられた意味論に沿って話しているときでさえ、話者はいずれかの仕方でも聞き手に理解されようという意図を持って話す。そしてこの意図は聞き手に関する話者の信念—とくに聞き手が話者をどう理解するかに関する信念—によるのである。(Davidson[1994]p.122)

デイヴィッドソンの考える話者は、聞き手に理解されようという信念を持っているが、ハンプティ・ダンプティにはそれが無い。このちがいによってマラプロピズムとハンプティ・ダンプティは明確に異なっているとデイヴィッドソンは考える。

ダメットは「語は語自体で意味を持つ」と主張する。だがデイヴィッドソンは、意味とは、話者が理解されようと話し、解釈者が理解するところのものであると考える。したがって、語がそれ自体で何を意味しているのかということは、相手が何を意味しているかを解釈しようとするときには関わりを持たないのだと反論する。なぜなら、語がたとえ解釈者や話者が知らない他の意味を持っていたとしても、それは話者の言いたいことを理解するときには関係してこないからである。話者と解釈者が知っていること、意図していることだけが解釈の場では重要なのだ。

だからこそ、また、話者は自分がどのように解釈されるのかについて考えながら話さなくてはならない。デイヴィッドソンはしばしば、話者は自分のことばを理解されたいと思っていると述べる⁶⁾。理解されようとは思っていないハンプティ・ダンプティに対して、コミュニケーションをする際のわれわれは「理解されること」を意図しながら話すのが常だということであった。

5 舞台上の出来事

マラプロピズムと意味の社会性に関するデイヴィッドソンとダメット、ハッキングの応酬を見てきた。ここではっきりしたのは、デイヴィッドソンが、マラプロピズムのようなルールをはみ出したことばづかいであっても、話者と解釈者が理解し合えばそれで伝達は可能だと考えている点である。つまり話者と解釈者の二者のあいだで通じるのであれば、言語は十分可能になると考えているということである。

だがデイヴィッドソンの以上のような応答には、次のような素朴な疑問が浮かんでくるように思われる。デイヴィッドソンはハンプティ・ダンプティには話者が解釈者に理解されようとしていないと言う。だが、それではマラプロップ婦人はどうだろうか。婦人は、解釈者に理解されようとしているために、理解を得ているのだろうか。そのようには思われにくい。そもそも婦人がマラプロピズムを連発するのは、口が滑って(slip of tongue)言ってしまうとされている。婦人はつい、そう言ってしまうのだ。そうであるとすれば、婦人に

は、婦人の言うことばが解釈者にどのように受け取られるかの配慮はないのではないだろうか⁷⁾。

つまり、デイヴィッドソンの上記の説明は、ハンプティ・ダンプティが理解されないことの説明にはなっても、にもかかわらずマラプロップ婦人が理解されることの説明にはなっていないのではないだろうか。つまり、マラプロップ婦人には当座理論が適用され、ハンプティ・ダンプティには当座理論が適用できないことが説明されないのではないか。当座理論はどのようなときに適用されるのか、われわれはより説得的な説明を必要としていると言えるだろう。当座理論の本質、当座理論と先行理論のより根本的なちがいはどのような点に存するのだろうか。

このような疑問について考えていくために、実際の場合から考えることにしよう。われわれが実際にマラプロップ婦人の言ったことを解釈してみるとする⁸⁾。婦人は舞台の上にいる。婦人のまわりには何人かの人がおり、おしゃべりをしているのだが、そのうちの一人が他のある人の特徴をうまくとらえてあだ名を考え出す。それにたいして婦人は感心して叫ぶのだ。「墓碑銘のすてきな乱れ！」（理解を進めるために日本語で無理に考えるのなら、「うまい網棚をつけたわね」という感じだろうか。）

それにしてもなぜわれわれはマラプロップ婦人の言いたいことがすぐにわかり、それが演劇の台詞であれば、観客として笑うことができるのだろうか。それは、われわれがその場にいるのであれば、婦人のことばを聞いているだけではなく、婦人を取りまく他の人物の言ったことやふるまい、そこにある物なども見ているからだろう。また、こういうときにはだいたいにしてどのような反応が起こるか（欧米ではしゃれた会話をおうおうにしてほめる）などの観察もあるかもしれない。

つまりわれわれはその状況全てと併せて婦人のことばを解釈するから、婦人を理解できるのではないだろうか。そしてそれは婦人のことばが指し示している当のことがなんであるのかを考えるということにはほかならないのではないだろうか。マラプロップ婦人の言いたいことをことばするためにはわれわれが行っているのは、規約主義が用意できるようなマラプロップ婦人の発言に関する意味の理解だけではなく、婦人を取り巻く世界に関する理解でもあるのだ。一つの発言の理解は、その場面が劇中で持つ意義や、その時婦人が何に注目しているのか、そのことばが舞台上にあるありとあらゆるものやことのなかでどの出来事に向けられたことばだと考えるのが一番適切であるのか、といった多くの理解によって構成されている。

対して、ハンプティ・ダンプティの発言を考えてみよう。ハンプティ・ダンプティはアリスと会話をしていく。ハンプティ・ダンプティは「あなたに栄光あれ（There's glory for you）」という発話で、「おまえさんにとっては全く言い負かされちゃった議論（There's a nice knock down argument for you.）」を意味しようとする。しかしここでハンプティ・ダンプティがこの言葉「あなたに栄光あれ」で指示しようとしている当の対象は、まったくハンプティ・ダンプティの頭の中にあり、アリスには共有できない。マラプロップ婦人の場合には舞台上にあった婦人の発言が指している当のことが、ハンプティ・ダンプティの場合にはないのだ。少なくとも公共の場合にはないのだ。

このように考えるなら、われわれは明らかにマラプロピズムとハンプティ・ダンプティをはっきりと区別できるだろう。マラプロップ婦人の発話についてわれわれが解釈すると

きには、われわれは婦人を取りまく他の出来事や人物から、婦人のことばが何を指示しているのかを考えることができる。しかし、ハンプティ・ダンプティの場合は、われわれにはまったく彼のことばが何を指示しているのか割り当てることがそもそもできないのである。

だとすれば、当座理論を形成するために必要であるのは、デイヴィッドソンがダメットへの反論で強調するような、話者の使うことばの意味を理解することに限られるわけではない。なるほど、ダメットやハッキングのような規約主義的な言語理解では、マラプロップ婦人の言わんとするところは理解できないだろう。しかし、デイヴィッドソンのように、話者と解釈者の二者の相互関係を強調することによっても、マラプロピズムは説明されないのではないだろうか。

このような実際の場面への検討からわれわれが得た結論は、これまでの個人言語論とどのようにちがうのだろうか。ダメットは個人が自分の意図のままにことばの意味を考えることはできないと考えた。語の意味は語自体にあるからである。それに対して、デイヴィッドソンは語の意味が変わったとしても、話者と解釈者のあいだで理解が成立するのなら、意味はその二者のあいだに存在すると考えた。ダメットからデイヴィッドソンのあいだで、意味は語自体から二者へと所有の主体が変わったのであった。

しかし、われわれが実践的な言語使用への考察から得たのは、マラプロピズムが通じるのは、意味が、話者と解釈者の二者だけではなく、そのことばが指示する当のものにも属するからだということであった。マラプロップ婦人の指す対象は公共的な場にあるが、ハンプティ・ダンプティの指示する対象は公共的な場でない。つまり理解の場面には、話者と解釈者、そして当のものという三者の関係があるのであり、それがお互いに観察可能だということが、語の変更を可能にしているのだ。

6 意味が変わるという問題ではなく指示が変わらないという問題

前節でわれわれは実際の言語使用の場面から、解釈の時には何がその理解に働いているのかを見てきた。マラプロップ婦人は本来なら「あだ名のすてきな言い回し」が指示すべきことを指示しながら、「墓碑銘のすてきな乱れ」ということばを使う。それでいて、われわれは、婦人が何を指示しているのかを解釈することができる。それはわれわれが舞台上のものや出来事を観察してもいるからであった。

ここに表れていることをこのように言うことが出来るだろう。この個人言語の問題とは、語の意味の変化の問題ではなく、話者と解釈者が共有する指示の問題であるのだ。つまり、デイヴィッドソンが強調すべきだったのは、論文「墓碑銘のすてきな乱れ」の前半で言及されるK.ドネランの指示の理論と個人言語の関係であったのではないか。そもそも、この論文はドネランの指示の理論へのコメントから始まっている。デイヴィッドソンはマラプロップ婦人とドネランを同じようなことをやってのける例として関係づけている。しかし、そうでいながら、デイヴィッドソンはドネランの理論が当座理論とどのような関係を持つのかを説明せずに、その「通じてしまう」という側面にのみ注目している。そのため、ダメットと自分の議論の根本的なちがいをとらえていないように思われる。だが、ダメットの意

味論とデイヴィドソンの意味論はより根本的に異なり、当座理論と指示の問題はデイヴィドソンが示唆している以上に深く関連している。最後に当座理論とはどのような理論であるのか、ドネランの指示の理論を詳しく検討することで見ていこう。

ドネランは有名な論文「指示と確定記述」⁹⁾において確定記述の用法を指示的用法と (referential use) 帰属的用法 (attributive use) の二つに区別した。デイヴィドソンの論点はドネランの指示的用法の特殊な性格の問題と重なる論点である。ドネランの区別を見てみよう

たとえば、ある男スミスが無惨なやり方で殺されているのを見たスミスの友人はその場に犯人がいなくても「スミスを殺したやつは気が狂っている」と言うかもしれない。このとき発言者は「殺したやつ」という記述で実際の人物(実体)を指示しているのではない。発話者は当の人物がだれかを知っているのでもない。このような無惨な殺し方をしたやつは当然気が狂っているに違いないと、属性の側から記述をあたえているのである。ドネランによればこれは帰属的用法と呼ばれるべき用法である。一方、語の意味は全く同じ発言「スミスを殺したやつは気が狂っている」であっても、スミスの友人がスミス殺人の法廷で、わめき声を上げたりするような被告の常軌を逸した行動を見てそう言ったのであれば、それは指示的用法と呼ばれるべきである。指示的用法では、話者はその当の人物を見知っている。つまりその実体に関する発言を行っているのだ。

指示的用法においては、このように人が実体に関する発言をしているということが、指示的用法と帰属的用法に異なる働き方をさせる。指示的用法においては発言が部分的に誤っていたとしても話者の言いたいことは理解される。スミスの友人が被告のことを「スミスを殺したやつ」と言って指示しても、被告はもしかしたら本当には殺人を犯していないかもしれない。もし裁判の結果として、その被告の無罪が確定したとしたら、スミスの友人は被告を犯人扱いしたことに関しては咎があるだろう。しかし、それでもスミスの友人が「スミスを殺したやつ」で被告を指示し、裁判席で行った被告についてのなにがしかの報告(「スミスを殺したやつは気が狂っている」)は聞き手に確かにある情報を伝えているのである。聞き手がそこで理解したことが無罪評決の後には全くの偽になってしまうわけではない。聞き手は、その誤った表現で話者がなにを表そうとしていたかを変わず理解できるのだ (p.286)。

ドネランのこの観察は、われわれが解釈をするときに語の意味だけでなくその当の指されたものがどのようなものであるかということから話者の言わんとすることを理解しようとしているということをよく表している。これはちょうどマラプロップ婦人がどのようなことばを使おうとも、その言わんとするところを理解されるのと同じである。つまり、個人言語という問題が提起しているのは、ある語の意味が変わることではなく、ちがう語を使うにもかかわらず指示が変わらないことなのである。デイヴィドソンは、マラプロップ婦人の発話に関して、「当座理論によってわれわれは「墓碑銘」に新たな役割を割り当てる事ができる」(Davidson[1986]p.103)と言う。しかし、「墓碑銘」という語は新たな役割を獲得するわけではない。ここから先、「墓碑銘」が「あだ名」を指すようになるわけではない。

(マラプロップ婦人の発言に引っかけてしゃれる場合を除いては。) また、この発話「墓碑銘のすてきな乱れ」が「あだ名のすてきな言い回し」を意味するようになるわけでもないだろう。婦人は今度はまったく違うことばで、先ほどと同じ出来事を指示するようにな

るかもしれない。（たとえば"A nice fringement of epicardium !"（心外膜のすてきな縁取り）などと。）

ドネランの言うように、実際われわれは、自分の言及したいものの特徴をうまく思い出せないまま発話し、聞き手にその発話の内容を訂正されたりすることがある。例えば、「Mちゃんのボールを借りよう」「あれはYくんのボールでしょ」「あ、そうだった」といった具合に。この場合最初の話者は「Mちゃんのボール」という言葉でYくんのボールについて言及し、聞き手に理解されている。ことばが公共的に観察できる何かを指示しているときにはこのようにことばを通常とは異なるように使っても相手に理解してもらえるのだ。このコミュニケーションは話者と解釈者のあいだだけで成り立っているのではない。このコミュニケーションに参加しているのは、話者と解釈者そしてボールの、三者のあいだで成り立っているのである。

すると、以上のような指示の理論からわれわれは次のような結論を得ることができるだろう。当座理論と先行理論の区別は、当初デイヴィッドソンが考えていたよりももっと根本的な違いであるのだ。当座理論が存在することによって、言語の範囲が確定されず、「これまで考えられてきたような意味での言語は存在しない」と言えるのは、婦人の使うことばが「前もって」与えられる規約によらなくても理解されるために言語の範囲が確定できなかったためではない。そのつながり方はそもそも「前もって」知ることはできないのだ。なぜなら、先行理論は話者と解釈者がこれまでに習得してきた言語であり、すべてがすでに書き出すことの出来るルールブックに載る規約的な理論であるが、当座理論はコミュニケーションに参加する当の出来事やものへの指示を含むからだ。当の出来事とわれわれは解釈のまさにその場でしか関係することができない。そのため、当座理論は先行理論とは存在論的にまったく異なる理論なのである。¹⁰⁾

7 まとめ

マラプロップ婦人のように異なる語を使いながらそれでも言いたいことを理解させてしまう言語行為は現に存在する。デイヴィッドソンは、言語をまだ学習していないこどもとすでに学習した大人が新しい語を獲得することはまったく異なると考え、個人言語がわれわれに十分可能な言語であると主張した。それに対してダメットは語がそれ自体で意味を持つという立場から、デイヴィッドソンの主張は、話者の意図をそのまま語の意味のように考えている誤りをおかしていると非難した。デイヴィッドソンはその批判に対して、話者が解釈者へ配慮をすることをあげて、意味が単に話者だけでなく解釈者にも属していると再反論する。

しかし、その主張だけでは、当座理論の働きは十分には説明できず、マラプロップ婦人とハンプティ・ダンプティの区別はできない。そこでわれわれは、当座理論が話題となっている当の出来事や事物への指示を含む理論であることを指摘した。

先行理論はこれまで学んできた言語の規約の集積であり、話者と解釈者に前もって共有されている理論である。しかし、当座理論はその場のものや出来事を含む三項関係を構築する。当座理論とは、存在論的にも先行理論と異なる理論なのである。

注

1) 残念ながら、執筆者はシェリダンのこの戯曲に当たることはできなかった。そのためこの日本語訳にはまったく自信がない。後述する本稿の主旨からしても戯曲に当たることができなかったことは遺憾である。

2) このような哲学者の例としてデイヴィドソンはバージ、クリプキ、ウィトゲンシュタイン（もしくはクリプキに解釈されたところのウィトゲンシュタイン）、ダメットらの名前をあげている (Davidson [1994] "The Social Aspect of Language", *Truth, language, and history* Oxford 2005 p.119)。

3) "The Parody of Conversation," *Truth and interpretation : perspectives on the philosophy of Donald Davidson* edited by Ernest LePore Blackwell, 1986

4) この「彼 (he)」は文法的には「話者 (speaker)」を指すと考えられるが、文脈から考えて、話者と聞き手の両方を含む、もしくは聞き手を意味すると考えられるだろう。

5) "'A Nice Derangement of Epitaphs': Some Comments on Davidson and Hacking," *Truth and interpretation : perspectives on the philosophy of Donald Davidson* edited by Ernest LePore Blackwell, 1986

6) たとえば、Davidson [1983] "A Coherence Theory of Truth and Knowledge", *Subjective, Intersubjective, Objective* Oxford, 2001 p.147

7) もしかしたら、シェリダンの人物造形では、マラプロップ婦人は、解釈者が自分のことばをどう受け取るのかを熟考している人であるのかもしれない。しかし、重要なのは、婦人が解釈者についてあまり考えない「天真爛漫な」人物であったとしても、マラプロピズムは理解されるだろうということである。

8) 注1でも述べたとおり、執筆者はシェリダンの戯曲に当たっていない。よって以下の想定は全くの想像である。

9) "Reference and Definite Descriptions", *The Philosophical Review*, Vol. 75, [1966]

10) ドネランの主張に対して、A.マッケイは「ドネランは、指示に関するハンプティ・ダンプティ的説明を提示しているように見える。彼は指示を、指示しようと意図することに変えてしまおうとしているのだ」と批判する。マッケイによればドネランの言うこの「指示的用法」は話者の意図を強調しすぎている。ドネランは話者が意図したのであれば、本来はその言葉が表していない意味でも、その言葉に表させることができるかのように語っている。これはまさにアリスと話しているときのハンプティ・ダンプティの態度であるというのだ。(MacKay [1968] "Mr. Donnellan and Humpty Dumpty on Referring" *The Philosophical Review*, Vol. 77,) マッケイの批判はダメットのデイヴィドソンへの批判によく似ているということが言えよう。マッケイもダメットとがデイヴィドソンに関して考えたのと同じように、ウィトゲンシュタインの意味論に訴えて、ドネランが話者の意図によって語の意味を変えてしまうと批判するからである。

しかし、このマッケイの反論に対するドネランの反論も、デイヴィドソンがダメットにした反論と同じように、語の意味が変わること、話者と解釈者のあいだで受け渡されるものにだけ注目しており、十分ではない。ドネランはマッケイの反論に対して、「ハンプティ・ダンプティを再び仲間にする」(Donnellan [1968] "Putting Humpty Dumpty Together Again" *The Philosophical Review*, Vol. 77,) と題した論文において、「もし前もって、ハンプティ・ダンプティがアリスに彼が「栄光」ということばで意味することの明示的な規定を示していたなら、このエピソードはルイス・キャロルによって意味することにまつわる問題を提出するために使われはしなかっただろう (p.213)」と反論する。つまりドネランによれば、その語が何を指示しているのかが示されれば語は意味を変えることができる。「背景があたえられたなら、わからないことを言うやつだという咎は与えられないだろう (p.213)。」

しかし、本文でも前述したように、問題は語の意味が変わることではなく、指示が変わらないところにあるのであり、ドネランの説明は不適切だ。ドネランはマッケイの反論に対して、「ハンプティ・ダンプティ再び仲間にする」ことによって再反論するのではなく、「ハンプティ・ダンプティはもともと仲間ではない」と再反論すべきであったのだ。

参考文献目録

Davidson, Donald. [1970] 'Events as Particulars', *Essays on Action and Events*, Oxford, 1980.

—— [1983] 'A Coherence Theory of Truth and Knowledge', *Subjective, Intersubjective, Objective*, Oxford, 2001.

—— [1986] 'A Nice Derangement of Epitaphs', *Truth, language, and history*, Oxford, 2005.

—— [1990] 'Meaning, Truth and Evidence', *Perspectives on Quine*, Blackwell, 1990.

—— [1992] 'The second Person', *Subjective, Intersubjective, Objective*, Oxford, 2001.

—— [1994] 'The Social Aspect of Language', *Truth, language, and history*, Oxford, 2005.

Dummett, Michel. [1986] "A Nice Derangement of Epitaphs": Some Comments on Davidson and Hacking', *Truth and interpretation : perspectives on the philosophy of Donald Davidson*, edited by Ernest LePore, Blackwell,

1986.
Hacking, Ian. [1986] 'The Parody of Conversation', *Truth and interpretation : perspectives on the philosophy of Donald Davidson*, edited by Ernest LePore, Blackwell, 1986.
Quine, Willard. V.O. [1960] *Word and Object*, The MIT Press.
McDowell, John. [1994] *Mind and World*, Harvard U. P.

謝 辞

本研究は JSPS 科研費 24652001 の助成を受けたものです。